木岡哲学対話の会 2023.11.12

国家の論理（下）――戦争について（3）

１　種の論理

田辺元（1885－1962）は、ベルクソンによる〈閉じたものー開いたもの〉の二分法を受け容れたうえで、「閉じた社会」（種）を「個」が開くとする「種の論理」（弁証法）を具体化した。→①

○〈種－個－類〉の「弁証法」
・種――人間が第一次的に属する「閉じた社会」。個の自由を禁圧する強制力を具える。
・個――国家（種）の束縛に反抗し、自由に生きようとする我欲の主体。
・類――〈種－個〉の対立を乗り越える第三の次元。人類的地平。

個が罪悪の自覚にもとづく「菩薩行」をつうじて、「類的個」に転換するとともに、種的な国家を「類的国家」に変容させるという青写真を描き出した。→②

２　「種の論理」の帰趨

[歴史的帰結]
太平洋戦争は、欧米列強からアジアを解放する「聖戦」である、との大義を多数の若者に信じさせ、死地に追いやる結果を生じた。

[問題点]
批判（1）:〈類－種－個〉は、意味上の区別であり、社会存在の区分としては成り立たない。
→③
批判（2）:「種の論理」は、一つの社会（日本）で内向きに閉じた論理のシステムであり、日本以外の社会には通用しない。
→他者との〈出会い〉（対話）を契機としない自己中心的論理の限界。

[総括]
「閉じた社会」をそのまま「開いた社会」に転換する論理はありえない。「閉じたもの」と「開いたもの」の〈あいだ〉に立ちつつ、異なる風土間の〈出会い〉に赴く〈間風土的主体〉として生きることを期す以外にない。→④

［資料］

① 実践への関心

「ベルクソンの二分法は、理論的関心の優位を証し立てるものの、この私がいまいかに行為すべきか、という切迫した問いに答えるものではない。ところが後者こそ、「種の論理」を構築しようとする当時の田辺が、関心を寄せる中心的課題であった」(『邂逅の論理』春秋社、2017 年、173 頁)。

② 個の自覚による統一

「愛は開いた社会において本来罪の赦しであり、悪人成仏の慈悲であり、敵に対する愛である筈である。……ただ罪悪の意識を転換点とすることに由ってのみ、道徳宗教の二元統一が完成せられる。しかしてこの統一が行われる所に個人も成立するのであって、二種の社会を現実に媒介するのは個人に外ならない」(田辺元『種の論理』岩波文庫、2010 年、54 頁)。

③ 「種の論理」批判

「個が種の中にあるのは個が種の「意味」に於てあることであり、種が類に於てあるのも類の「意味」に於て種が規定されていることを言う。これらの関係は存在的であるよりも意味的ではあるが、正しくは意味的存在の関係とでもいわるべきであろう」(山内得立『意味の形而上学』岩波書店、1967 年、430 頁)。

④ 風土と風土の〈あいだ〉

「**間風土的**　社会空間としての風土と風土の〈あいだ〉に関係するあり方。いかなる風土のうちにもない、出会いの場所が開かれることを予想する。

　――主体　特定の風土に属しながら、その外に出て異なる風土の主体と出会うための〈あいだ〉(無からの場所)を切り開こうとする主体」(『風土の論理――地理哲学への道』ミネルヴァ書房、2011 年、350 頁)。